

## 第 13 冊

# 『平安京はいらなかった』 ～古代の夢を喰らう中世～ 桃崎有一郎、吉川弘文館、2016年 (中)

## 完成しなかった平安京

今回は、平安京を藤原京・平城京と比べながら、異なる面や共通する面などを見てきました。中国をモデルに都城を建設したにもかかわらず、中国の都城とは随分とかけ離れていましたね。

都は羅城によって囲まれてはいないし、防衛的な都市でもありませんでした。羅城門から南にまっすぐ伸びている朱雀大路は、82mもの幅があり、とても実用的なものではありませんでした。鴻臚館で宿泊した渤海使たちだけが羅城門をくぐり、朱雀大路を使って平安宮に行くことができました。

今回、私が興味をそそられたのは、様々な場面で見ることがある「平安京図」です。平安京図では、見事に都市設計の通りに、建設されていることになっていますが、しかし、真実は「平安京は一度たりとも完成したことはなかった」のです。

## 「平安京図」は妄想！！

いつものように、桃崎有一郎氏の『平安京はいらなかった～古代の夢を喰らう中世～』から見ていきましょう。

平安京のメイン・ストリートである朱雀大路が、日常的な生活で通行するためではなく、特別な日に特別な行事を見せるために存在したならば、そもそも平安京自体がそのような設計思想に基づいて造られたのではないか、という疑いが生じる。平安京が未完成であった事実は、その仮説を支持している。

ここでいう「平安京が未完成」とは、計画通り造り終えられなかった事実と、後から継ぎ足して無理に京域を拡大した事実の、二つを念頭に置いている。

平安京といえば、教科書に必ず載る碁盤目状の整然とした街区の都市を、誰もが想起する。しかし、このいわゆる「平安京図」のような姿の平安京は、歴史上ただの一度も存在したことがない。・・・

「平安京が未完成」というのは、どういうことでしょうか？これには2つの事実があるそうです。

1つめの事実は「**計画通りに造り終えることができなかった**」こと。

もう1つの事実は、「**無理矢理北側に域を拡大していった**」こと。

では、1つめの事実「**計画通りに造り終えることができなかった**」ことについて見ていきましょう。

京都の町は、「平安京図」にあるように南北や東西の道路により完全に、整然と、分けられていたと思っていました。ところがところが、私たちが教科書などで見る「平安京図」はあくまでも想像図であって、実は平安京はこのモデル図とはほど遠い状態の町であつたらしいのです。

桃崎有一郎氏は「右京」地域について、次のように述べています。

平安京が未完成であったことは、考古学的な痕跡、というよりも痕跡の不在から、裏付けることができる。

例えば、平安京北西部の右京一条四坊十二～十四町跡、三条三坊十二町跡、四条四坊十三町・十四町の区域は、低湿地や池の跡しかなく、宅地化された痕跡が出土しない。また平安京の西南端である右京八条四坊・九条三坊・四坊はどれだけ発掘しても、平安時代の痕跡（遺構・遺物）がまったく出土しない。都城の内部は原則として宅地利用されるはずだが、北西部は人が住んだ痕跡がなく、南西部は開発自体がなされていないのである。

また平安京の西端の西京極大路は、遷都当初には存在しなかった。西京極大路のうち土御門大路～中御門大路の区間は、大治四年（1129）に西隣の法金剛院が建立された際に、はじめて造られた。そもそも西京極大路の考古学的な遺跡はすべて平安後期に限られ、平安京造営時はもちろん、平安京中期にさえ存在したことがない。平安時代が終わる頃まで、平安京の西の境界となる大路は設計図の上しか存在しなかった。

南側も穴だらけだ。右京八条三坊付近は平安前期には湿地帯で、八条大路を造れる状況ではなかった。平安中期に排水の目処が立ってようやく造営されたが、発掘調査で出土した八条大路は、路面幅がわずかに4mしかなかった。『延喜式』が定めた本来の幅八丈（24m）の17パーセントに過ぎず、「大路」と呼ぶにはあまりに貧相な、最低限の生活道路であった。

さらに平安京南端の九条大路は、右京職では西寺の門前あたりまでしか整備されておらず、それより外側の九条三坊・四坊には存在しなかった。・・・・・・・

とすれば、その未完成の中途半端な羅城こそ、日本の唐風都城の完成形だったのである。

右京地域は「衰退」したことはよく知られています。ところが、**桃崎有一郎氏**は左京地域も完成してなかったと言うのです。

そしてそもそも、平安京の南東部分は、左京側でも開発が止まっていた。西洞院より東、七条より南には平安前期に路面・側溝が存在した痕跡が全く見つからないのである。この未開発地域が全く放置された理由は、鴨川に近すぎる立地と、排水困難な地質にあった。

・・・鴨川の流路・河原自体が京極（東京極）大路を西に踏み越えて、平安京域に食い込んでくる。そのような場所では条坊制の地割りを施行することが物理的に不可能なため、この部分が未開発のまま放置され、その結果、左京もまた完成しなかった。・・・前期平安京では、この左京の東南端と、右京の北西端・南西端は全く市街地化されず、街路すら十分に存在しなかったのである。

しかも問題は、鴨川の沿岸近辺だけにあったのではない。この未開発地域に含まれる左京八条三坊・・・・では、平安前期に町小路（現、新町通）を挟む川や湿地が存在した。平安京では、鴨川の洪水被害に遭いやすいばかりでなく、街区に鴨川の支流自体が流れていたためであり、それらに挟まれた地域もまた水はけの悪い湿地であった。・・・

以上から明らかのように、平安京図の姿は理想型・想像図であって、現実には一度も実在することなく、途中で開発が放棄されていた。それでも古代国家が不都合なく機能したならば、平安京はそもそも全域を開発する必要がなかったと言うことであり、つまり設計段階から平安京は、過大なのであった。

そう言えば、「**徳政相論**」というのがありましたね。延暦24年（805）に、桓武天皇は東北地方での蝦夷征討と平安京造営の2大事業の中止を決定しました。

ここで質問です。桓武天皇の行ってきた2大事業（**軍事と造作**）によって民衆が苦しんでいるとして、**この2大事業の中止を求めた人物は誰ですか？**

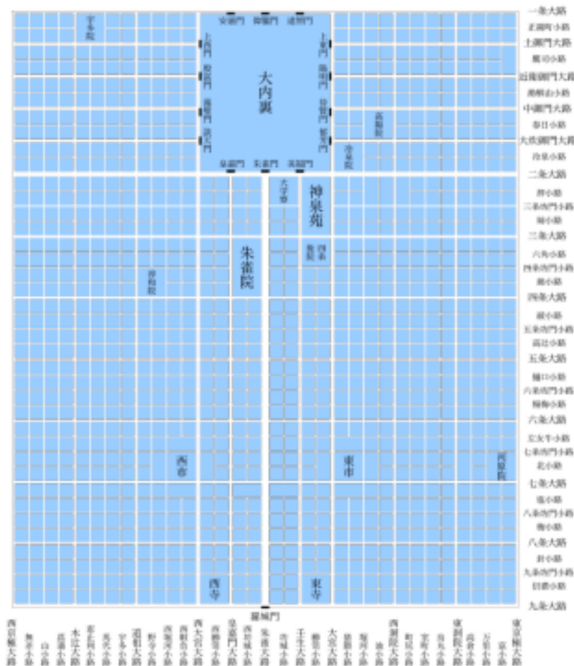
**式家の藤原緒嗣**でした。

では、彼と反対の主張、つまり**2大事業の継続を主張した人物は誰でしょうか？**

**菅野真道**でしたね。

こうして、長岡京の遷都からわずか11年で、平安京の造営は停止されました。そして、平安京の造営職も廃止されました。この造営職の廃止は、平安時代の造営済みの部分だけを維持・改変してゆく方針に転換したと言っても良いでしょう。つまり、平安京は遷都11年目に途中で造営を放棄され、完成することが諦められたのです。

なお、『類聚三代格（るいじゅうさんだいぎやく）』によれば、平安京建設の中止から18年後（828年）の時点で、京中の町数は580余町であり、予定していた町数（左京・右京ともに568町の合計1136町）の半分強しか開発されていなかったのです。



もう1つの事実、「無理矢理北側に域を拡大していった」ことについて、見ていきましょう。

朝廷は当初計画の平安京全域をとうてい埋められなかったにもかかわらず、後から一度、設計段階に存在しなかった区域を増設し、京域を拡大した形跡がある。その証左は、12世紀半ば過ぎの廷臣中山忠親（ただちか）の日記『山槐記（さんかいぎ）』に記された「昔、土御門を以て一条大路と為す。其の後、北辺二町宮城に入れられ、すでに京中たり（昔は、今の土御門大路が「一条大路」だったが、大内裏を北に二町拡大して一条大路が今の位置になった）」という記事である。彼の言を信じれば、平安京は一度造営された後、北に二町（約250m）分だけ、後付けで拡張されたのだという。

この説に真実みを与えるのが、大内裏東面の上東（じょうとう）門と、西面の上西（じょうさい）門の存在である。・・・・・・・・・・・・・・・・

上東門・上西門が後付けの、ほかの門とは異なる門であったということは、その名称からも察せられる。大内裏の諸門の名は、門を警衛する氏族の名を、好字（よい字）で書き換えて付けたものである。門の名と、かっこ内に対応する氏族の名を列挙すると、東面では陽明門（山部氏）・・・西面では殷富（いんぷ）門（伊福部氏）・・・北面は達智（たつち）門（多治比氏）・・・南面は美福（びふく）門（壬生氏）・・・という具合である。弘仁九年（818）に好字で表記するよう改正される以前は・・・氏族の名をそのまま門の名としていた。このように氏族の名と対応しない大内裏の門は、南面中央にあって朱雀大路と直結する特別な正門の朱雀門のほかは上東門と上西門だけである。上東門・上西門という名は、「上（＝北）側にある東（または西）側の門」という、物理的な所在地を直接記述しただけに過ぎない。

平安京に先行する都城（藤原京・平城京）では、大内裏（宮城）には十二門がありました。平安京で

はわざわざ粗末な門を二つ増やしました。「平安京図」の大内裏を囲む門を数えてみると、14あります。実際には門が14あるのに、あえて上東門・上西門を門として数えず、「宮城十二門」と総称しました。

本来、平安京でも十二門しかありませんでしたが、大内裏が北に拡張された結果、もとの一条の位置に門がないと各門の間隔が不釣り合いになって、対称性・規則性が損なわれて不恰好であるため、門を増やしました。しかし、「宮城門の数は十二」という理念を継続させる必要上、新たな門はあえて粗末に作り、門として数えないことにした、ということでした。

## 衰退する右京

さて、先ほど「右京」地域について、計画通りには造られなかったということを指摘しました。もう少し、詳しく見ていきましょう。

平安京は未完成であったと言うだけでなく、その規模を縮小させていきました。10世紀末に書かれた**右京の衰退についての有名な史料があります。その史料の名前と作者を答えてください。**ちょっと難しいですか？

**慶滋保胤（よししげのやすたね）**が記した『**池亭記（ちていき）**』ですね。少し、紹介しておきましょう。

**「予、二十余年より以来、東西二京を歴見（れっけん）するに、西京は人家漸く（ようやく）稀にして、殆（ほとほ）と幽墟（ゆうきょ）に畿（ちか）し。人は去ること有りて来ること無し。屋は壊ること有りて造ること無し」**

※自分はここ二十年来、東西二京（左京と右京）を観察し続けた。その間、西京（右京）では人家が次第に稀になり、殆ど廃墟に近くなった。人が去ることがあっても新たに來住することはなく、建物が壊れることはあっても新造されることはない

平安京が衰退しているという実態がそこに書かれているのです。**桃崎有一郎氏の『平安京はいらなかった～古代の夢を喰らう中世～』**で確認しましょう。

**平安京北西部（右京北部）に低湿地や池しか出土しないという、……。そもそも右京全体で、その西半分の開発は殆ど手つかずのまま終わった。何故なら、京域の西を流れる桂川（大堰川）と、北野天満宮の西隣付近から右京の中を南北に流れる紙屋（かみや）川の氾濫原であった右京は、水はけの悪い湿地が多く、宅地にすることはおろか、耕作地として利用することも困難な地質だったからである。・**

**平安京の歴史は鴨川の洪水との戦いの歴史といってよいほど、朝廷は鴨川のコントロールに苦慮した**

が、西部では紙屋川・桂川の水と戦わねばならなかった。

現在、旧平安京の北辺・一条通の標高は京都御所付近で海拔59m、南辺・九条通の標高が東寺付近で25mなので、平安京は南に向かって下がるように傾斜し、南北で約34mの高低差がある。九条通には国宝の東寺五重塔が面し、相輪（最上層の屋根の上に載せる装飾物）まで入れた全高は約55mだが、相輪を除いた五層目の屋根の最上部が約39m、屋根の最下部が約31mの高さにある。これと比較すると、平安京は九条から一条へ北上する間に、東寺五重塔の五層目までと同じ分だけ、標高が上がっていることになる。

このように平安京が南に低く北に高いことは有名だが、実は北東から南西にかけても傾斜しており、南西へゆくほどわずかに低い。この低地に紙屋川・桂川の水が注ぎ込み、左京にはあまり被害を及ぼさずに右京を水浸しにした。・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

近年の考古学的成果によれば、右京にも宅地の痕跡はあり、右京も完全な無人ではない。・・・・・・・・。

しかし、問題は「幽墟に饑し」という過疎化である。

考古学的にも、平安後期の右京では平安前期・中期の建物が廃絶し、耕作地（田畠）に変化していたことが確認されている。そもそもその時期には、朱雀大路より西、二条大路より南で、殆ど街路の路面・側溝が見つからない。

右京の西堀川小路（現在の紙屋川の南北方向の流路と、その南の西土居通）では、11世紀後半に路面に木棺墓が営まれて墓地にされてしまったあげく、12世紀前半には街路自体が埋没してしまう。また、道祖（さえ）大路（現・佐井通）・野寺小路（現・西大路）に至っては、平安中期以降に路面が流路、つまり川になってしまった。全体として平安後期の右京は、「田園地帯の中に市街地的な部分が島状または帯状に点在していた」景観であった。

つまり、右京は洪水などに悩まされていた土地ということで、民衆にとっては使いにくかったり、大内裏から遠かったりして人気がなかったということなんですね。だから、人々はそこに住まなくなり、結局、自然淘汰ともいうべき状態になって「捨てられた」土地になったところが多かったというわけです。

右京の衰退を最も直接的に物語る事実の一つが、「東朱雀大路」の登場です。これは平安京の東の境である東京極大路のさらに東側に、11世紀末までに新設された街路です。ここで、あなたに質問です。

新しく誕生した「東朱雀大路」という通りは、現在の何という通りに該当するでしょうか？今回は4択でいきます。正しいのはどれでしょうか？

- ①新京極通      ②寺町通      ③河原町通      ④木屋町通

正解は、③です。東朱雀大路は現在の河原町通にほぼ該当するとのことですよ。

では、右京が衰退したのに対して、左京はどうだったのでしょうか。

## 発展する左京

桃崎有一郎氏の『平安京はいらなかった～古代の夢を喰らう中世～』では、次のように述べておられます。

宅地や人口の密度が高まる一方の左京北部が外へと面積を広げ、街路が新設されたこと自体は、怪しむに足りない。しかし重要なのは、それが「朱雀」と名付けられた事実である。本来の朱雀大路は平安京の中軸線であり、「朱雀」の名は、「京の中心」と同義だ。・・・青龍・白虎・朱雀・玄武の四神に守られる地形が都にふさわしいという中国の四神相應説でも、朱雀が守るのは都の南であって、断じて東ではない。その名が平安京の東限のさらに東に用いられたと言うことは、当時の生活実体上、京都の中心（中軸線）がそちらに移っていたことを意味する。東朱雀大路のすぐ東には鴨川があり、その東には白河という大規模な都市域が、11世紀頃から急速に開発されていた。つまり、都市域としての京都は、左京北部と白河が、鴨川・東朱雀を中心に相対する形に移行していた。そこでは、右京が完全に切り捨てられている。

本来の朱雀大路は、現在の千本通りに該当します。平安京の中軸線である朱雀大路が大きく東へ移行し、「東朱雀大路」と名のるほどの街路が誕生したということは、現在の河原町通が平安京の中軸になったということなんですね。

でも、河原町通はもともと鴨川の河原が通りになったのですが、鴨川に並行にした通りですね。つまり、鴨川が平安京の中軸といってもいい状況になり、鴨川を挟んで現在の岡崎や祇園の方へ市街地が広がっていったということです。

ところで、京に上ることを何と言いますか。また、京に入ることを何と言いますか？

「上洛」「入洛」のようにいいますよね。京の町のこと「洛中」といいますよね。

では、「洛」とはなんでしょうか？「洛中」とは、どの範囲のことをいうのでしょうか？

16世紀以降、京都の名所・風物を大画面の絵に描いた『洛中洛外図』がたくさん描かれました。かつては北は一条大路、東は東京極大路から東朱雀大路の平安京内を「洛中」と呼び、京外のことを「辺土（へんど）」と言っていたそうです。

そして、その境界ははっきりとしていて、合わせて「洛中辺土」といいましたが、室町時代頃から「洛中洛外」という表現が流行っていきました。

中世では、「洛中」は京都を意味するようになっていますが、中世の京都は平安京よりも北と東にな

んとなく拡大していたため、「洛中」と「洛外」の境界が不明瞭になりました。

ところが、16世紀末に豊臣秀吉が、平安京の境界を大胆に無視して、京都を取り囲む**御土居（おどい＝土塁）**を構築します。平安京を造立した時には、城壁がなかった京に、御土居という城壁が誕生したのです。そして、これ以降、**御土居の内を「洛中」、その外を「洛外」と呼ぶ**ようになりました。

「御土居」の外は洛外とされた結果、10箇所ほど設けられた出入り口を除いては、御土居の内と外を自由に行き来できなくなってしまいました。

ちなみに、江戸時代に入ると、出入り口が次々と造られていったので、その数は40箇所ほどに増えていきました。



北野天満宮  
の御土居跡

話を元に戻しましょう。重要なことは、古代末期以降、洛中・洛外の**「洛」が京都を意味**したことです。しかし、**「洛中」には、実は平安京の半分しか含まれていない**ということなんです。どういことでしょうか。

平安京の造営当初、**左京を「洛陽城」、右京を「長安城」と名づ**けました。

長安城は周知の通り唐の都で、洛陽城は後漢から隋まで、いくつかの王朝が都とした都城です。洛陽城は唐において**陪都**（ばいと、複都制において、主たる都を補完する都）として重要視されていました。

つまり、中国の二つの代表的な都城が、理念上、一つの平安京の中に含まれているかのように名づけられたのです。**平安京＝長安城＋洛陽城**ということだったので。

しかし、長安の面積は平安京より4倍も広がったのです。さらには、堅牢な石造りの城壁（羅城）に囲まれた長安城に対して、平安京では南方だけに、土製の垣が、飾り物として申し訳程度にありました。ですから、平安京の実態は、規模においても長安城に比べるべくもない貧弱な都城に過ぎませんでした。



その貧弱な平安京が、中国の洛陽と長安を足し合わせたくらい雄大な都城であると、豪語したのです。古代の日本人は、大言壮語というか「はったり」「背伸び」が好きなのですね。頭の中に描いた平安京と、現実の平安京は違いすぎますよね。

そして、平安京で「洛陽」といえば左京のことを表していましたよね。「洛中」の「洛」は、この左京を意味する「洛陽城」の「洛」です。つまり、京都の代名詞である「洛（中）」は、京都の東半分を意味するに過ぎない言葉が基になっている、という事実は重要です。

平安期を通じて進行した中世「京都」の形成過程で、右京は切り捨てられ、残った左京（洛陽城）だけが「京都」となったのです。

もし、朝廷が東西を逆にして、右京を「洛陽城」左京を「長安城」と名づけていたら、上洛とか洛中とかの名前は誕生しなかった、ということになりますね。

つまり、左京を「長安城」と呼んでいたのだったら、上洛は「上長」、洛中は「長中」なんていう言葉になっていたのでしょうかね。なんか、言いにくい感じがします。長年「上洛」などと使ってきたからだと思いますが。

右京に対して、左京は全く対照的でした。慶滋保胤が記した『池亭記』では、次のように記されています。

*「東京の四条以北、乾（いぬい）・良（うしとら）の二方は、人々貴賤無く、多く群衆する所なり。高家（こうけ）は門を比へ堂を連ね、小屋（しょうおく）壁を隔て簷（のき）を接す。東隣に火災有れば西隣は余炎を免れず、南の宅（いえ）に盗賊有れば北の宅は流矢（ながれや）を避け難し」*

※「東京（左京）の四条大路より北、特に乾（北西）・良（北東）のあたりは、貴人も庶民も、身分を問わず多く群集して住み着いている。貴人の豪邸は競い合うように門を構えて建物を建て連ね、庶民の小屋も壁を接し軒が連なるように、隙間なく立ち並ぶ。ここでは東に火事があれば西隣の家は延焼を免れず、南に盗賊が入って戦闘になれば北隣の家は流れ矢から逃れられないほど、宅地の密度が高かった」

上記のように、過疎化して衰退する右京と、人口が過密化して繁栄する左京の様子は、とても対照的です。

では、どうして左京が繁栄したのでしょうか？どんな人々がこの地域に住むようになったのでしょうか？

実は、左京の最南部の七条～九条の開発は、遷都後もしばらく行われませんでした。その区域に、平安後期になると一斉に街路が出現したのです。

その理由は、主に2つあります。1つは**人口集中に伴う左京の拡大**、2つめは**そのために必須の治水工事**です。

この左京七条～九条間の新規開発をもたらした原因は、左京の北半分への人口集中が進み、その結果北半分では抱えきれなくなったからです。その結果、人が住めるように治水・排水設備が整備され、左京の南部が開拓されていったのです。この開拓地は殆ど手つかずであったため、新興勢力が広大な土地を占めて新たな街区を形成していくことになりました。

その**新興勢力の1つは王家**でした。この頃、上皇が「**治天（の君）**」と呼ばれて政務を握る「院政」という家父長制的な権力のあり方が発達しました。これにより、治天と彼の直系親族が、巨大な富を集積する最大の新興勢力となりました。

この治天を家父長とする一家を、近年の歴史学では、近代の「皇族」と区別するため、またより広い範囲を含む「皇族」と区別するために「王家」と呼んでいますね。

院政の進展とともに、王家は莫大な宅地・所領を領有していきました。特に院政最盛期の治天である**鳥羽法皇の皇女暲子（しょうし）内親王**は、女院（天皇の母や有力な皇族女性に与えられる、院＝上皇と同等の待遇）となって八条院と呼ばれ、**八条院領**という巨大な荘園・所領群を相続したことは有名です。八条大路・東洞院大路の北西に御所を構え、八条大路より北、東洞院大路を中心に、東は万里小路から西は堀川小路までを八条院領に繰り込んでいきました。その広さはなんと全体で十二町にも及んでいます。

さて、**もう1つの新興勢力は武士、特に平家**でした。**平清盛**の弟頼盛（よリモリ）は、妻が八条院に仕える女房（女官）であった縁で、八条院の母の**美福門院（びふくもんいん）**から、八条北・室町西にあった邸宅を譲られていました。その地は**八条院領**に含まれていたため、ここに平家と八条院領との密接な関係が生まれ、のちに清盛がすぐ西に広大な西八条殿（にしはちじょうどの）を造営する機縁となったのです。

八条院領が出てきました。さて、この八条院領って、220カ所以上の所領であり、後に南北朝に分かれた皇統の経済的基盤になりましたね。その皇統の名前を教えてください。

そう、**大覚寺統**でしたね。後の**南朝の経済的基盤**となりました。

それに対して、**北朝の経済的基盤**となったのが、**持明院統**ですね。

もうひとつ、質問です。**平氏政権**と言えば、**〇〇〇政権**とも呼ばれます。〇〇〇には京都の地名が入ります。この場所こそ、平氏の公達たちが多くの館を建て、政治の中心地となったところでは、**〇〇〇に入る言葉は何ですか？**

そう、答えは「六波羅」でしたね。

清盛を中心として、平家一門は清盛の祖父正盛の代から本拠地としていた河東（鴨川の東岸）の**六波羅**を離れ、東寺の真北に、東寺より西に一町はみ出る位置に移りました。具体的には、大宮の西、坊城の東、八条坊門の南、八条の北にあたる6町で、中心は八条坊門櫓（くしげ）亭でした。

こうして左京が拡大した結果、左京つまり洛中の市街地が南北（上下）に二分するようになります。つまり、「上京」と「下京」ですね。



図6 上京・下京図  
〈滋賀県立史土城考古博物館「室町最後の将軍一足村義昭と織田信長」図録より〉

「京都町屋 ちおん舎」より  
<https://www.chionsha.com/chikichishoten/>

そして、南北朝時代には、二条大路を境にして、内裏や幕府などの政治的中心が置かれ、富裕層が集まる「**上京**」と四条大路を中心とした民衆が集う商業地域「**下京**」に分かれてしまいます。この辺りの京の市街図は「応仁の乱」を学ぶ時に、史料で出てきますよね。

その後は、先ほど触れた豊臣秀吉が始めた御土居建設などの都市改造が進みました。戦国時代には2つに分かれていた上京と下京の市街も再び1つにつながっていきます。荒廃していた街路の再開発と併せて、既存の街路と街路の間に新たな街路（御幸町通・富小路通・堺町通など）が開かれました。

ここで、質問です。洛中に散在していた寺院を東京極大路沿いに集めた結果、できた通りは何でしょう？

京都に住んでいれば、簡単ですよ。答えは、「寺町通」です。

## 潰される街路、宅地は拡大

11世紀末期以降、院政や平氏政権が登場する頃には、平安京の中心は朱雀大路から大きく東へ移動してしまっていました。当然のことながら、住民が住む住宅地も東へ移動しています。しかも、右京から人々は左京へと移動してきたはずですね。そうすると、必然的に住宅地が不足してきます。そこで、当時の人々は苦肉の策を見いだします。

それが、広い道路、しかもそれほど利用価値のない道路を、潰して宅地にするというやり方です。

どうやって、それを実現したのでしょうか？

実は、平安京の街路（大路・小路）の両脇には、排水のために側溝という溝が設けてありました。その溝の外に築地が築かれ、築地の向こう側が街区＝居住地でしたが、居住地を修築する際に、その側溝を街路側へ移動させて、街路を狭め、その分だけ居住地を広げてしまうというやりかたです。

*街路を犠牲にしてでも左京の宅地を広げたい、という欲求が存在した事実は、二つのことを裏付けている。一つは、言うまでもなく左京の人口密度の上昇だが、もう一つは、「居住地拡大のためなら、街路を狭くしてもよい」という発想の存在自体である。「狭めても実用上問題ない」と考えられたからこそ狭められたに違いないのであって、やはりそもそもの平安京の街路幅は、実用上必要な広さを超えていたことが明らかである。*

*前述したように、平安京の坊（四町×四町の十六町の区画）は大路に沿った築地で包囲され、内外に出入りするための利便性は犠牲にされていた。平安京の大路は、生活者や生活物資を（特に庶民のレベルで）円滑に移動させるための動脈ではないし、それらで囲まれた条坊・町は開かれた空間ではない。むしろ大路は、治安・美観維持のために彼らを坊の中に閉じこめる壁であった。そのような作りの街路で、活発に人・モノ・情報が行き来すべき商業都市が発達するはずがない。*

と、桃崎有一郎氏の『平安京はいらなかった～古代の夢を喰らう中世～』で述べられています。

京都の町を歩いていると、不思議なことに気づきます。つまり、整然と碁盤目の様になっているはずの通りが突然幅が狭くなったり、行き止まりになったりするのはです。東西の道路である一条通から九条通を見ていくと、国道1・9号線となる五条通は結構道路の幅（片側4車線くらいあります）が広く、交通量も非常に多くなっています。

三条通も四条通も京都の繁華街を通る主要道路と言えますし、南の九条通にしても、片側2車線あり

ます。でも、一条通や六条通って、いったいどこにあるの？っていう感じです。私は京都に長年住んでいます、一条通や六条通を歩いた記憶がありません。

そこで、一条通と六条通をネットの地図で調べてみました。

一条通は京都御苑より西側に狭い一方通行の通りが走っています。西の端は馬代通りあたりでした。六条通は、河原町通から烏丸通りまでは片側一車線のそれなりに広い道路ですが、烏丸通りより西は非常に狭くなっており、新町通に突き当たって終わっています。

これらの通りは平安京ができた当初、もともと30mプラスαの道幅がありました。当然、東西にまっすぐ延びていました。でも、現在はほぼ東西にまっすぐに延びてはいますが、所々で道路がカーブしていたり、道幅が狭くなっています。しかも、場所によっては、道路の幅が極端に狭くなったり、突然「消え」て、行き止まりになってしまいます。

この原因が、平安京の街路を潰して住宅地を造るということだったのですね。「どうせ、使っていない道路なんか、潰して宅地を広げても誰の迷惑になるものでもないさ」と高をくくった人々が、実際に行動に移したことが、京都の街路が曲がっていたり、狭くなったりしている元凶だったというわけです。

## 町屋の成立

平安時代はじめに造られた平安京ですが、時代が古代から中世に変化していく間にも、変貌を遂げていきました。

平安京が北に拡張され、右京の衰退と左京の過密化が進行した10世紀頃から、洛中に「町屋型建物」が造られていきます。「町屋型建物」といえば、現代京都の貴重な景観としても著名な、あの「京町屋」の源流です。

町屋型建物の特徴は、①「街路に面する」②「小規模である」③「立ち並ぶ」という3点にあるそうです。近世から近現代の京町屋も、玄関を開くといきなり道路があり、その間に庭も何もありません。そして、俗に「鰻の寝床（うなぎのねどこ）」といわれるほど間口が狭く、奥に細長いのが特徴ですね。

このような町屋の条件を満たす住居跡が、右京七条二坊十二町や左京四条四坊十二町に確認されているそうです。右京にある前者は、元々、人が住まなかった未開拓地に新たに成立した町並みの中にあり、左京にある後者は、過密な繁華街の中にある（現在の藤井大丸デパートの、四条通を挟んだ左斜め前）そうです。いずれも10世紀頃から、実用性を重視して発展した地域でした。

桃崎有一郎氏によれば、

垣によって閉じこめられるのではなく、街路に直接面して建つ町屋型建物の出現により、塀や門などを通さず、住民が直接街路と交流できる町並みが発生した。それは、決して朝廷が実用性を重視し始めたことを意味しない。平安京の運用ルールを維持できなくなり、朝廷がそれを厳密に統制することを断念したに過ぎない。それは、何度禁じても一向に根絶できない住民の勝手な宅地・街路利用であり、ある段階で朝廷はこれを徹底弾圧する意欲を失った。

そして、摂関家が朝廷を実質的に支配し始めた平安中期頃から、廷臣は儀礼用と生活用で空間を切り分け、不便な儀礼用邸宅を維持しつつ、生活用邸宅で大いに利便性を追求し始める。朝廷の支配者が平安京の不便さに耐えられなくなってそのように舵を切った結果、平安京は使いやすい中世「京都」へと加速度的に変貌を遂げてゆくのである。

外敵の侵入を防止するための羅城を造らなかった古代の平安京は、一言で言えば「使い勝手の悪い」都でした。朝廷は持て余し、法皇（王家）は捨てたがり、住民は破壊したかったのが平安京でした。「平安京図」のような完成した都は、空想上でしか存在していませんでした。

それが、中世になると平安京は「使いやすい」都へと加速度的に変貌していったのです。朝廷も、王家も、庶民も、古代の都をどんどん使いやすくしていきます。当然ですが、使いやすくするためには取り壊したり、どこかへ移動させたりしていくのです。

今回は、そのあたりのことを見ていきましょう。

次号に続く